

## 大学統合 卒業生を結ぶ後輩の活躍



ともに長い歴史がある大阪市立大と大阪府立大が、2年前に統合してできた大阪公立大。今どうなっているのか。大学担当記者として、そして一人の市大OBとして、とても気になる。そんな時、2通のメールが相次いで届いた。

1通は、大公大が東北大と包括連携協定を結ぶことに関する記者会見の案内だった。旧帝大の一角で高い研究力を誇る東北大は、政府による10兆円規模の「大学ファンド」から支援を受ける候補の第1号だ。世界のトップと競う大学と、「母校」はどんな連携を進めるのか。興味を湧き、会見に参加してみた。

連携の中心は、東北大の次世代放射光施設を使って様々な物質を解析し、大公大の材料科学の研究を強化することという。百校ある公立大で最大の大学が、国際競争力のある教育・研究を目指すことに異論はない。ただ、前身の両大学は貧困や人権、地域医療などの課題と向き合うことで高く評価されてきた。そうした歴史も生かしてこそ、新大学の特色をより強くアピールできると考える。

もう1通のメールは、市大、府大の両漕艇部(ボート部)のOB・OG会が統合した「紅艦会」から届いた。関東支部が開く東京での会合の案内だった。

学生の本務は学習や研究だ。だが、部活動やサークル活動での経験の方が、良き思い出となり、人生の糧になった人は多いだろう。私もそんな一人だ。他大学や企業、警察などと交渉して新しい大会を立ち上げるなどした経験は、社会に出るうえで自信になった。

だが、OB・OG会には参加せずにした。大先輩が中心で気が重かったからだ。ただ今回は、大学統合の一面が見えるかも、と意を決して出席してみた。

前身の部での練習方針が異なり、現役部員は試行錯誤を続けているという。それでも全日本大学選手権4位との活躍が紹介されると、「統合の効果だ」と大盛り上がり。全員で肩を組み、関西ボート界で愛される「琵琶湖周航の歌」を合唱してお開きになった。

卒業生こそ、出身大学へのこだわりが強く、溝があるのでは。参加前のそんな予想は、見事に裏切られた。

(編集委員・増谷文生)



連携協定を結んだ大阪公立大の辰巳砂(たつみさご)昌弘学長(中央)と、東北大の大野英男総長(左から2人目)＝2月16日、東京都千代田区